

銀山上の畑焼と上の畑焼陶芸センター

上の畑焼陶芸センターの棚には、桃・仏手柑・ざくろの模様で飾られたコバルトブルーと白の繊細な磁器が並んでいます。これらの簡素で優雅な作品は、「銀山上の畑焼」の美学を体現したものです。この尾花沢地域の磁器の伝統は、1世紀以上にわたって失われていました。

「上の畑焼」は、江戸時代（1603～1867年）末期に窯が開かれました。長瀬藩（現在の山形県のごく一部）の藩主である米津政懿（1788～1853年）が、1833年に陶工に対してこの地域に登り窯を築き仕事をするよう依頼しました。陶工たちは、上の畑（銀山の近く）の土を使って、青い釉薬をかけた磁器を作りました。しかし、尾花沢の厳しい冬では、この登り窯を維持できず、窯はわずか10年後には放棄されてしまいました。上の畑焼は失われてしまったのです。上の畑焼は1980年までは消滅したも同然だったのですが、地元の陶芸家である伊藤瓢堂（1952年～）が、長年にわたって研究と実験を行い、この芸術をよみがえらせました。

上の畑焼は、多くの場合、三多紋で飾られています。これは、3つの象徴的な果物を模した伝統的な模様です。桃は長寿を表し、ざくろは多産を表し、仏手柑(指の形をした柑橘類)は幸運を表します。上の畑焼陶芸センターでは、独自の作品が購入できます。また、上の畑磁器の絵付体験や陶芸体験もできます。